観察者羞恥の規定因について

―心理的距離、自意識、共感性に着目して―

安藤ゼミ　新角　奈々

目次

第一章　序論

第1節　問題関心

第2節　先行研究

第3節　研究の目的

第二章　予備調査

第1節　目的

第2節　方法

第3節　結果

第4節　考察

第三章　本調査

第1節　目的

第2節　方法

第3節　結果

第4節　考察

第四章　総括

引用文献・参考文献

付録1　予備調査アンケート

付録2　本調査アンケート

問題関心

- 関わり合いの中で人は様々な感情を抱くが、その中に「羞恥」が存在する。
- 「羞恥」は共感性や公的自意識などと関連が見られている。
- Miller(1987)は他者の行動に共感することで自らの恥ずかしさとして感じてしまう状態を

  「**共感的羞恥**」と定義
- 桑村(2011)は共感的羞恥が必ずしも共感性を媒介とし発生するものか明らかではないため、「**観察者羞恥**」と名を改めて検討

→ **観察者羞恥の規定因や感じやすい状況について着目**

研究の目的

◆観察者と行為者の心理的距離、観察者の共感性や自意識は
観察者羞恥に影響しているのかを明らかにすること

✓観察者羞恥場面を { 公的な場 / 私的な場 } の2つに設定

✓行為者との心理的距離を { 友人 / 見知らぬ人 } の2つに設定

観察者羞恥の質問例

周りに 大勢の人がいる 状況で
親しい友人 が以下のような行動を
しているのをあなたが目撃した時、
どのくらい恥ずかしいと感じるか。

・大声で騒いでいるとき
・道端にゴミを捨てるとき
・服にタグが付いていたとき

調査概要

◆調査期間

2021年8月1日～9月12日

◆対象者

大学生男女148名（男性 45名、女性 103名）

◆調査方法

質問紙調査（Googleフォーム）

◆ 質問紙構成

・属性に関する項目
・共感性に関する項目
・自意識に関する項目
・観察者羞恥場面についての質問
・観察者羞恥場面についての記述

結果①
観察者羞恥と心理的距離、場所の関係性

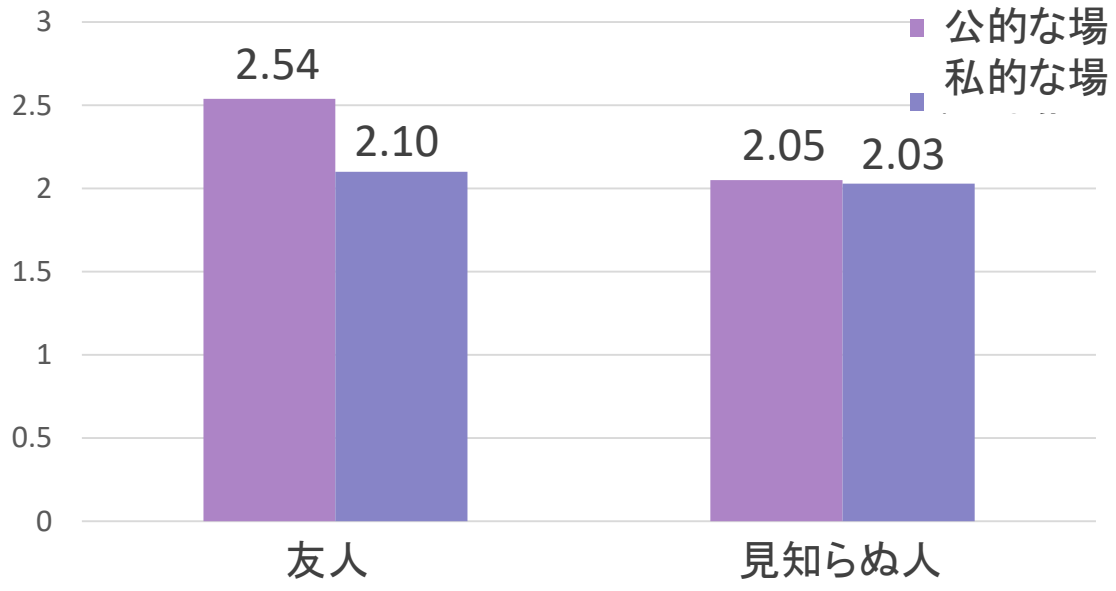

図.行為者と場所による各得点の平均比較

表.二要因分散分析結果

	F値		
	行為者	場所	交互作用
観察者羞恥	70.05***	45.51***	39.29***

*p<.05, *p<.01,***p<.001

結果②
観察者羞恥と公的自意識の関係性

		公的自己意識
観察者羞恥		.086
友人	公的な場	.112
	私的な場	-.010
見知らぬ人	公的な場	.074
	私的な場	.080

**相関係数は1%水準で有意　*相関係数は5%水準で有意

結果③
観察者羞恥と共感性の関係性

		共感性
観察者羞恥		.182*
友人	公的な場	.036
	私的な場	-.004
見知らぬ人	公的な場	.178*
	私的な場	.252**

**相関係数は1%水準で有意　*相関係数は5%水準で有意

考察①

◆心理的距離がより近い友人の場合では公的な場での方が観察者羞恥を感じやすい

➢行為者が友人の場合

自分も同類とみられるのではないかという不安からの羞恥

親しいもの、同じ集団に属すものとして恥ずかしい

他者からの視線
自己の評価に関わること

◆観察者羞恥と公的自意識との間に有意な相関関係は確認されなかった

➢他者の行為を見て羞恥を感じるというよりも自身の行動を見直して反省したり、自分はそのような行動をしないようにしようと戒めたりといった自己啓発的な感情を抱く可能性

考察②

◆共感性を感じやすい人の方が観察者羞恥を感じやすい

◆行為者が見知らぬ人の場合は特に共感性の高い人ほど観察者羞恥を感じやすい

➢人柄や能力を熟知している友人の場合、失敗などの羞恥行動は単なる「事故」とみなされやすい

➢見知らぬ人の方が自己の経験や対人不安などから羞恥心を感じやすくなる

置かれた場面や行為者との関係性によって羞恥心の起因や性質が異なる

ご清聴ありがとうございました